

慧海潮音『佛蹟志』の紹介

——仏足跡歌研究資料として——

山田 貞雄
小杉 秋夫

一、『佛蹟志』紹介の動機

本学大学院文学研究科に於いて、昭和六十一年度より、佐竹昭広教授指導の、仏足跡歌の共同研究が行われている。共同研究の主題は、仏足跡歌の典拠と和訳の問題である。我々はこの研究途次に、駒込西教寺沙門潮音編、『佛蹟志』（文政二年成立）の存在を知るに至った。

潮音は、真宗本願寺派の僧侶慧海の字である。天明三年（一七八三年）江戸四谷伝馬町に生まれ、幼少より江戸駒

込西教寺に入り、のち西教寺八代住持となった。天保七年（一八三六年）に没した。

文政の頃、富永仲基『出定後語』・服部天游『赤俣俣』の排仏論に対し、『摺裂邪網編』『金剛索』（日本思想闘争史料 第三巻）昭和五年・東方書院刊 収録）を著し、論駁した。真宗学匠の紀伝・著述・逸事を集めた前田慧雲『學苑談叢 初篇』（明治二十四年三月刊・前田慧雲全集第三巻）昭和六年・春秋社刊 所収）には、関東の英匠三人のうちの一人に挙げられ「博聞多識にして詩文を善す」と評されている。

さて、従来の研究史上で、『佛蹟志』が取り扱われたの

は、およそ以下の如きものであらう。

最も早いものと思われるのは、狩谷棧斎の『古京遺文』（文政元（二八一八）年自序）「佛足石記并歌碑」（大正元年刊本の複製（昭和四三年）による）中、歌を記した後に考証を施した部分で、第十五首「久須理師」の典拠として、潮音が涅槃經の客醫旧醫をあげていることにふれている。これは恐らく、『佛蹟志』の引用に該当するであらう。

次に、鷲尾順敬編『国文 東方佛教叢書 歌頌部』（大正十四年刊）で、碑文の「西域伝」が、『釈迦方誌』『法苑珠林』の文と合致することから、所謂孫引きであるという、潮音の説を紹介している。これも恐らく、『佛蹟志』によるものであらう。

次に、林竹次郎「恭佛足跡歌碑臆斷」（『萬葉集外来文学考』昭和七年刊 所収）がある。薬師寺佛足跡の研究史を概観し、『佛蹟志』の存在を紹介している。また、第二首の典拠として涅槃經を、第四首「夜与呂豆比可利」の典拠として「八萬光明」を、潮音がとっていることにふれる。

ただし、涅槃經典拠説に対し法華經典拠説を、また「夜与呂豆比可利」を「己乃美阿止夜、与呂豆比可利」と区切る説を、別に立てている。

次に、板橋倫行「仏足石歌碑の原所在について」（『史学雑誌』四〇編一―号（昭和四年）・『万葉集の詩と真実』（昭和三六年刊）による）では、先述の『古京遺文』の考証と同様に、潮音が「久須理師」即「釈迦」とする説を、涅槃經によってとることに同意している。

次に、加藤 諄「高遠建福寺仏足跡歌碑」（『国文学研究』二五・昭和三七年 早大）で、氏の蔵本『佛蹟志』写本一冊に付せられた岡正武の詞書と和歌に言及し、薬師寺の仏足石が信州高遠建福寺に写し建てられた経緯を探究している。

次に、金井嘉佐太郎著『仏足跡の研究』（昭和四六年刊）中、「我が国現存の主なる仏足跡」の章で、『佛蹟志』のとする仏足の諸相が、西域記、義楚六帖を典拠としているとのべる。また、碑文の年記の解説をはじめ、潮音の説にふれている。

以上、仏足跡歌の研究史上、仏足跡碑文の研究史上との二方面にわたって、潮音の『佛蹟志』の姿は垣間見ることが出来る。しかし、その全容はかつて一度も公になったことはなかった。

また、仏足跡歌の研究史上に限って見ると、我々の研

究途上に管見に及んだ限りでは、文政以来、昭和の現在に至るまで、九種余の註釈の書に、『佛蹟志』の名は、上記の林竹次郎「恭佛足跡歌碑臆斷」に見られるに留まる。

さて、我々の共同研究では、先に述べた目的、特に仏足跡歌の典拠が重要な課題となってくる。その観点に立つて『佛蹟志』を調査してみると、その引用書の種類と内容から、『佛蹟志』は重要な参考文献の一つであるという認識に至った。内典および外典に、これほどの典拠を求め、殆ど遺漏のない姿で引用をなし遂げた書物は、恐らくは、この『佛蹟志』が最初で、また他に類が無いであろう。

ここに、近世の仏教者による仏足跡の典拠研究が一絶頂をなし、現代の文学研究の視点からも有意義な業績を残していることを思い知るのである。

尚、この紹介を行うにあたり、諸本の閲覧を許可して下さった、国会図書館、早稲田大学図書館、翻刻を許可して下さった静嘉堂文庫の各位、および、蔵本の閲覧、その他の便宜を図っていただいた加藤諄早大名誉教授、蔵書印の解説に御教示をいただいた朽尾武教授、翻刻の指導をいただいた山田俊雄教授、そして、直接の指

導をいただいた佐竹昭広教授に心よりの謝辞を述べる。

(山田・小杉)

二、『佛蹟志』の諸本について

『国書総目録』に『佛蹟志』として、国会図書館、静嘉堂文庫、旧彰考館の三写本がしるされている。(彰考館蔵本の目録には、『佛蹟志』附佛跡紀文考證 小山田本 釋潮首編録 文政初年」とあり、増補で焼失とある。後述の黒河春村の識語に対校したとある、松屋本とは、この本のことか。小山田与清の号の一つに、「松屋」がある。)

また、版本は行われなかったと思われる。(同じく春村が対校したという版本とは、野呂元丈の『佛足石碑銘』のことか。)

現在、『佛蹟志』と題する本で、筆者が実際に調査したものは、以下の四本である。第一は、国立国会図書館蔵本である。(請求番号 午・五二。以下、国会本と称する。)第二は、加藤諄氏蔵本である。(以下、加藤本と称する。)第三は、早稲田大学図書館蔵本である。(以下、早大本と称する。)第四は、静嘉堂文庫蔵本である。(以下、静嘉堂文庫本と称する。)国会本は、その識語と蔵書印から、潮首自筆本と思わ

れ、『佛蹟志』『仏足跡紀文和歌畧註』の二部分からなる。

(詳細は後述の解題を参照されたい。)

加藤本は、国会本と同じ体裁の本で、巻頭に、加藤諄氏紹介の岡正武自筆と思われる詞書を伴った和歌を記した貼り紙があり、また末尾に、岡正武自筆と思われる識語をもつ。岡正武筆写本と思われる。

早大本は、国会本・加藤本の巻首に野呂玄丈編『仏足石碑記』版本一冊を付し、末尾に『舊醫新醫』と題する四丁を付した形をとる。巻首に付された『仏足石碑記』は、野呂玄丈編『仏足石碑銘』(宝暦二年自跋・版本一冊)を改題した本である。(写本ではない。)

版本『仏足石碑銘』を調査したところ、(佐竹昭広教授蔵本と静嘉堂文庫本蔵本による。)早大本に付された版本『仏足石碑記』と、内容は同一である。三本とも一六丁・一七丁に錯簡がある。但し早大本は、各丁表面の左上欄外に、「前」「後」と朱書し、錯簡を正す。(後述の静嘉堂本解題を参照されたい。)早大本『佛蹟志』にはさらに、扉と三四丁裏面に二葉の貼付がある。各々、本文とは別筆である。四本のうち、早大本だけにあるものと思われる。今回は調査の圏外とした。

早大本『佛蹟志』は、巻末に黒河春村の自筆と思われる、岡正武の識語(加藤本の識語と同じ内容)の写しと、それに次いで黒河春村自身の識語をもっている。黒河春村筆写本と考えられる。

静嘉堂文庫本は、早大本とほぼ同じ体裁の本である。ただし、巻首にある野呂元丈編『仏足石碑銘』以下、一冊全部が一筆の写本である。静嘉堂本に、固有の識語はない。(詳細は、静嘉堂文庫本『佛蹟志』解題を参照されたい。)

結局、国会本(潮音自筆)、加藤本(岡正武による写本)、早大本(加藤本からの黒河春村による写本)、静嘉堂本(筆者未詳であるが、早大本からの写本)の順で、四本間の先後関係が想定できそうである。

今回、第五章に翻刻したのは、静嘉堂文庫本である。その理由は、第一に、静嘉堂文庫本、国会本の二本を翻刻作業中に、他の二本の存在を知ることができた事情がある。

第二に、付箋や書き込みが夥しい国会本は、翻刻の際、翻刻者の恣意的な配置を強いられ、原型を保つことが困難だが、静嘉堂本では、付箋や書き込みがしかるべく本文に繰り込まれている。さらに、静嘉堂本は、国会本の

内容を、重複を正すほかに省くことはない、ことによる。尚、静嘉堂文庫本は、書写の状態が必ずしも良好とはいえないが、国会本との校合によって、その弱点を補うことができると思われる。

(山田)

三、国会図書館本解題

袋綴一卷一冊。請求番号、午・五二。

外形は、縦二四・五糎、横十六・二糎。絹糸四つ目綴じ。表紙は薄茶色、左肩に題簽、「佛蹟志 全」と墨書。但しこの表紙は後補で、帝国図書館蔵の六文字を散らし型押ししたもの。

半葉十行。紙数は、墨付き三三丁（佛足跡紀〔朱筆で「記」と訂正〕文和歌畧註」と記した中表紙二丁を含む）、第一丁、十二丁目、二九丁目は遊び。計三六丁。このうち二丁分は仏足石の図様に関する図と薬師寺仏足跡歌碑の図（図版を参照されたい）、「佛蹟〔志〕」薬師寺仏足跡碑文の写、潮音集録「佛足跡紀文考證」、同「南都薬師大寺佛足蹟〔碑文和歌畧註〕」の四部からなる。

四丁表から十一丁裏まで、「佛蹟〔志〕」の本文。十一丁

裏は二行で終わり、空白を置いて、最終の行に「佛蹟〔志〕終」とする。十二丁目は遊び紙。十三丁目は前述の中心表紙。

十四丁表から十六丁表まで、碑文の写を、墨の界線に囲んでしるす。十六丁裏は白紙。

十七丁表から二八丁裏まで、「佛足跡紀文考證」の本文。二九丁目は遊び紙。

三十丁表から三五丁表まで、「南都薬師大寺佛足蹟〔碑文和歌畧註〕」の本文。三五丁裏は白紙。

全体にわたり朱書き入れ・朱加點・付箋・墨書き入れ・訂正などが施されている。ことに十九丁・二四丁は、表四丁を残して切り取られている。このため、次の二十丁表は前四行分が空白となっており、二四丁の内容は次の二五丁の内容と一部重複している。また「南都薬師大寺佛足蹟〔碑文和歌畧註〕」の部分において、出典として引いた典籍の本文の一部に朱の点を加えられている。

蔵書印は、一丁表に「青木印」（青木信真）・西教寺印が押された別紙が貼付されている。西教寺印については後述する。「青木印」上に「な 二千七百七十六号」と墨書。また、二丁表に「帝国図書館蔵」、「寒柯之印」と思われ

る印、「鳥崇」あるいは「鳥崇」と思われる蔵書印がある。この「鳥崇」乃至「鳥崇」の印は、国会図書館蔵本、潮音著『無用閑談』（文政六年写、請求番号一八・二六二）第一紙にも同一のものが見える。

西教寺印は、富永仲基『出定後語』を論駁した無相文雄『非出定後語』橋本律蔵旧蔵写本（国会図書館蔵、請求番号二〇九・六五六）第一紙右下の印と同一のものである（同書の書誌は、梅谷文夫・水田紀久『富永仲基研究』昭和五九年、和泉書院刊、二四九頁・二五〇頁、参照）。潮音にも『出定後語』を論駁した『摺裂邪網編』の著作があり、橋本律蔵旧蔵『非出定後語』は潮音の所持本であるかと思われる。また、国会図書館本『佛蹟志』巻末には「駒山沙門」「恵海之印」が押されており、いま即断は避けたいが、国会図書館本が潮音の自筆本である可能性が高い。（小杉）

四、静嘉堂文庫本解題

静嘉堂本は『静嘉堂文庫蔵書國書分類目録（正）』の、書畫金石の部にある、「佛足蹟誌」碑銘一卷 佛蹟志一卷 野呂元丈・釋潮音編 寫 一冊 八一函 二五架）

（登録番号一四六八四）である。

外形は、縦二七・五厘、横一九・五厘。絹糸四つ目綴じ。表裏の表紙は、水色紋様入の和紙。表表紙の題簽に、「佛足跡誌 全」と墨書きする。

墨付きは一丁表より五二丁裏まで。一冊の大部分が一筆とおもわれる写本。蔵書印は一丁表に「静嘉堂文庫」陽刻印が一つあるのみ。識語については後述する。

この本は、正確には、野呂元丈編の『佛足跡碑銘』、潮音編の『佛蹟志』、佛足跡碑文の写、潮音集録『佛足跡紀文考證』、同『南都薬師大寺佛足蹟碑文和歌略註』、集録者不明（黒河春村か）『舊醫新醫』の六部からなり、早大本と同一である。（碑文とその考證の順以外の丁付、各丁の割り付けも早大本と同一である。）

一丁表より一九丁裏まで、野呂元丈編『佛足跡碑銘』の写本。（早大本では、版本。早大本をふくめ、調査を行った、三版本の『佛足跡碑銘』には、一六丁と一七丁に錯簡があり、そのうち早大本には錯簡を正す朱注がある。（先述の通り）静嘉堂本の写本は、錯簡がない。版本の陰刻の部分は、陽刻様に書写する。『佛足石碑銘』の部分で上記以外は版本と同一。但し静嘉堂本に、『佛足石碑銘』の

題はない。(早大本では、前述のように、題に『佛足石碑記』とある。二十丁表より二二丁裏まで、仏足の相に関する図・薬師寺仏足石の図に、注を加えたものがある。国会本は、静嘉堂本にない仏足の図一葉を貼付する外は同一。(図版を参照されたい。)

二二丁表から二九丁裏まで、『佛蹟志』の本文。二九丁裏は二行で終わり、空白をおいて、最終の行に「佛蹟志終」と記す。

三十丁表から三一表まで、碑文の写を、墨の界線に囲んで注と共に記す。

三二表から四二表まで、『仏足跡紀文考証』の本文。四二丁裏は白紙。

四三丁表から四八丁裏まで、『南都薬師大寺佛足跡碑文和歌略註』の本文。四八丁裏には、加藤本にある岡正武の識語と、早大本にある黒河春村の識語が、一筆で並べて記されている。

四九丁表から五二丁裏まで、『舊醫新醫』の本文。五二丁裏は三行で終わり、そのあとは、空白。識語等はない。静嘉堂本で、朱が用いられているのは、以下のとおり。野呂元丈『佛足石碑銘』に相当する部分では、十二丁表

裏の加点・欄外朱注。十四丁表から、十八丁裏までの仏足跡歌に付した漢字の注。さらに、今回五章に翻刻した部分では、二十三丁表三行末から四行頭に導く線、三十丁表裏の欄外注の一部、三十五丁表から四二丁表までの見出しを囲む□、四三丁表から四八丁表までの歌の番号を囲む○、四三丁表から四八丁表までの、旧版本・松屋本との対校結果の注、四九丁表から五二丁裏までの『舊醫新醫』の部文の「、」である。(これらは、早大本にある朱書を其儘伝えているようである。)

静嘉堂本の加点は、翻刻の通りである。今回の翻刻に際しては、校合の範囲外とした。(山田)

(本紹介で、国会本の調査は小杉が、加藤本・早大本・静嘉堂本の調査、および翻刻、全編の企画・調整は山田が、行った。)

*本稿脱稿後、校正中に、左の論を見ることができた。いずれも静嘉堂本『佛蹟志』の潮音の説を引用している。

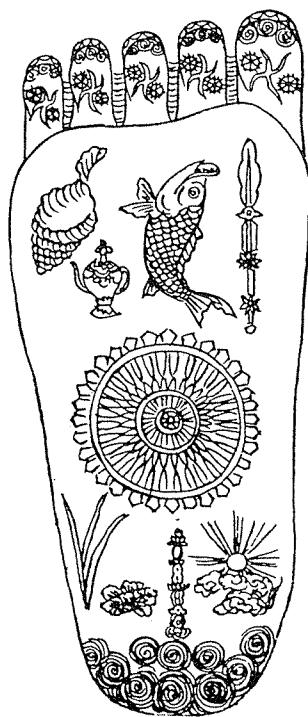
・廣岡義隆「佛足石記・同歌碑調査報」

・(三重大学日本語学文学報)「昭和六十二年三月」

・廣岡義隆「佛足石記及び佛足石歌碑の用字」

(宮地 裕編『論集 日本語研究(二) 歴史編』

(明治書院・昭和六一年一月)



出八事諸忍候
善導大師行狀記



国会本二丁表および貼付一葉

藏佛經二卷曰自有衆生樂觀如來足跡乎云相又曰足指網間如羅文相彩於其文間衆彩玄黃不可具名

上總州千田邑彌念寺無量壽佛像足下織文

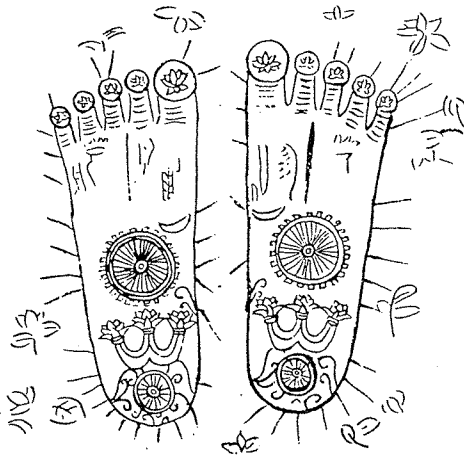
相似義梵六略所記



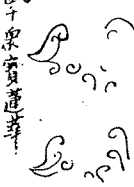
一卍字
二花文
三網紋
四寶銀
五龍身
六蓮身
七花龍
八雲
九月王
十千輻輪
十一象牙生花文
十二村花王頂
十三如山文
第十四花
第十五花
第十六花
第十七花
第十八花
第十九花
第二十花
第二十一花
第二十二花
第二十三花
第二十四花
第二十五花
第二十六花
第二十七花
第二十八花
第二十九花
第三十花
第三十一花
第三十二花
第三十三花
第三十四花
第三十五花
第三十六花
第三十七花
第三十八花
第三十九花
第四十花
第四十一花
第四十二花
第四十三花
第四十四花
第四十五花
第四十六花
第四十七花
第四十八花
第四十九花
第五十花
第五十一花
第五十二花
第五十三花
第五十四花
第五十五花
第五十六花
第五十七花
第五十八花
第五十九花
第六十花
第六十一花
第六十二花
第六十三花
第六十四花
第六十五花
第六十六花
第六十七花
第六十八花
第六十九花
第七十花
第七十一花
第七十二花
第七十三花
第七十四花
第七十五花
第七十六花
第七十七花
第七十八花
第七十九花
第八十花
第八十一花
第八十二花
第八十三花
第八十四花
第八十五花
第八十六花
第八十七花
第八十八花
第八十九花
第九十花
第九十一花
第九十二花
第九十三花
第九十四花
第九十五花
第九十六花
第九十七花
第九十八花
第九十九花
第一百花

南都藥師大寺佛跡縮寫其相唐藏難了

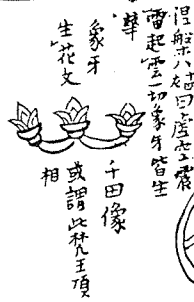
按佛三昧經四六曰足下千輪輪相中出大光明其光如華華二
相次繞佛億百千等嚴淨三十三日如來足下千輪輪相中
莊嚴放百千衆寶光明普照一切法界曰如來足下千輪輪中
有光明名曰千輪輪相



同六九曰佛足下千輪輪相二輪相各兩八萬
四千衆寶蓮華



藥師寺佛跡
衆螺之相



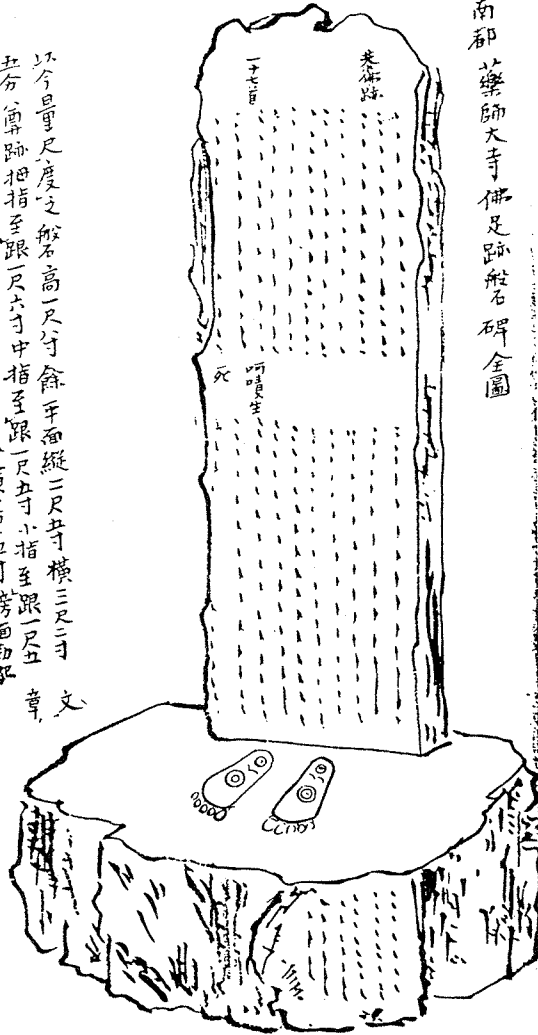
千田像
或謂此梵王頂
相



藥師寺佛跡如是

常麻變相中寶螺相似雲形故誤爲螺爲雲

南都北樂師大寺佛足跡般石碑全圖



以今量尺度之般石高一尺一寸餘平而縱二尺一寸橫三尺二寸五分
 鼻跡指至跟一尺六寸中指至跟一尺五寸小指至跟一尺五寸
 指處橫量一寸中心橫量六寸跟處橫量九寸傍面勒記
 碑高六尺餘廣一尺一寸餘厚一寸五分鐫和歌二十一章某二
 歌編入拾遺集紀文及和歌如下所註解

佛蹟誌

東都駒山西教寺泐門潮音編集

觀佛三昧經六如曰若有衆生佛在世時見佛行者步之中見千輻輪相除却千劫極重惡罪佛去世後三昧正受想佛行者亦除却極重惡業雖不想行見佛跡者見像行者步亦除却極重惡業

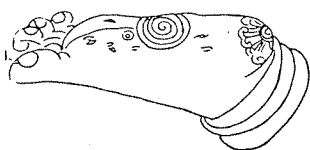
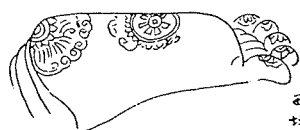
莫哀經五右是入郡國州城大邦縣邑聚落足不踐地千輻輪文自然輪現柔輭殊妙香潔蓮華而現于地如來之足踐於其上其有虫蟻含血之類遇如來足晝夜七日而得安隱壽終之後復生天上其功德如是諸觀佛三昧經一右曰觀如來脚指端螺文相如毘紐羯摩天所畫之印自有衆生樂觀如來足下平滿不啻一毛足下千輻輪相較輞具足魚鱗相

當麻變相文毫中所夢

古國泊模如石版行
更有銘文難見

西域記所出十指花文

鼻最相海品曰
如未有大人相為
通照法界海重
如未足下十指端
相輪經、莊嚴



觀仙三昧經曰足跟亦有梵王頂相

藥師寺藥師足
長一尺八寸 橫七寸八分

靜嘉堂本二〇丁表

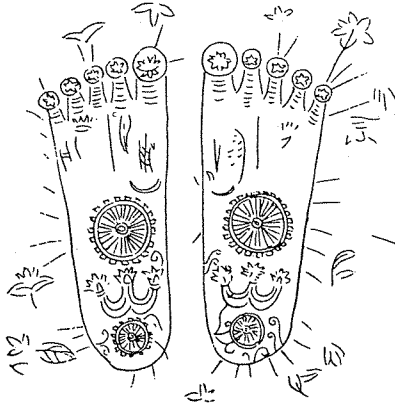
觀佛經一土曰自有衆生樂觀如來足趺平正相又曰足指網
間如羅文相彩於其文間衆彩玄黃不可具名

上總列十四色攝念字無量壽佛像足下纖文

稍似我楚六帖所記

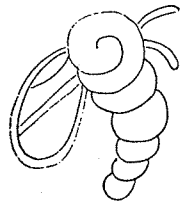


南都華師大寺佛跡縮寫其相象威難了



觀佛三昧經四說曰足下千輪輪相中出光明其光如華
其千々相次繞佛像而回六趾曰佛足時足下千輪輪
相一輪相皆而八毫四千衆宝蓮華華最增三十三趾
曰如來足下千輪相輪相在足最放百千衆宝光明
普照一切法界同柱回也未足下千輪相中有妙光明
名普照王

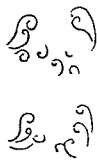
常麻變相中宝螺猶似雲形故錄宝螺
為云



涅槃八品曰盡空震雷起雲一切象牙皆生
華

象牙
生花
文
相
千田像
或指此
梵王頂

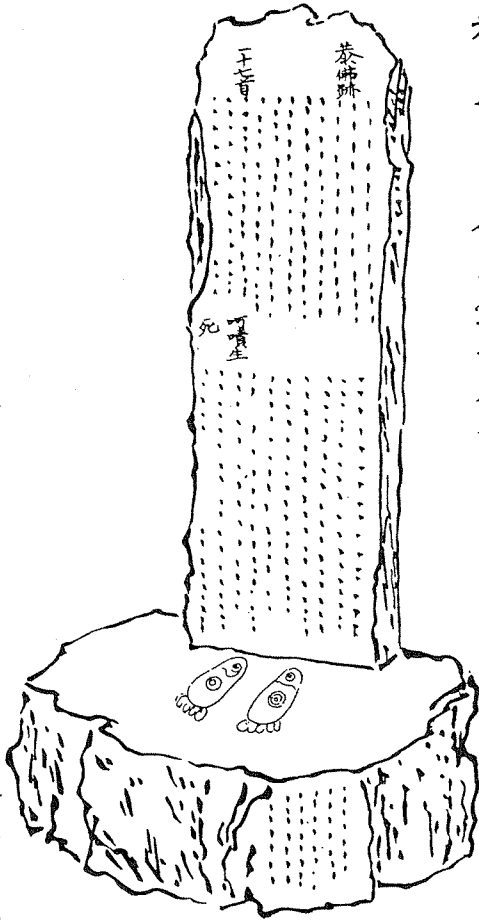
華師寺佛
跡如此



華師寺佛
跡之相

靜嘉堂本二二丁表

南都藥師大寺佛足跡磐石碑全圖



以今量尺度之磐石一尺八寸餘平面縱二尺五寸橫三尺二寸五分尊跡拇指至跟一尺六寸中指至跟一尺五寸小指至跟一尺二寸指亦橫壹分半心橫壹六寸跟亦橫壹五寸傍面勒記文碑高六尺餘廣一尺五寸餘厚一寸五分銘和歌二十一章第二章歌銘始遠集紀文及和歌如下所注解

佛蹟誌

東都駒山西教寺沙門潮音編集

觀佛三昧經六_五曰若有眾生佛在世時見_レ仏行者步步之中見_レ十輻輪相除却_レ十劫極重惡業罪_レ仏去世後三昧正定想_レ仏行者亦除_レ十劫極重惡業雖不想行見_レ佛跡者見像行者步步亦除_レ十劫極重惡業

大哀經五_三曰出入郡國州城大邦縣邑聚落足不踐_レ地十輻輪文自然輪現柔轆殊妙香際蓮華而現于地如未之足踐_レ地其上其有喪鐵舍血之類遇_レ如未足盡夜七日而得安穩壽終之後復生天上_{其功德如此}其功德如此

觀仏三昧經一_三曰觀如來脚指端螺文相如毘紐羯摩天所畫之印自有眾生樂觀如未足下平滿不空一毛足下十輻輪

五、翻刻 静嘉堂文庫本『佛蹟志』

山田貞雄 翻刻

凡例

〔底本について〕

一、定本は、静嘉堂文庫蔵『佛足跡誌 全』（「碑銘一卷」「佛蹟志一卷」）野呂元丈・釋潮音編 写本一冊（14684。1冊81函24架）である。

一、翻刻した部分は、底本の、野呂元丈著「碑銘一卷」（二丁表から十九丁裏まで）を除く全部分である。

〔使用の漢字について〕

一、翻刻に使用した漢字は、おおむね、JIS規格第一・第二水準漢字である。

一、右以外には、以下の外字を用いた。

湊繞輞窠簪兢擎涪倣悞鐃迂嚕膏璫奕姑咽譏冊轅臬洹閭畧戮（初出順）

一、翻刻に際し、底本に使用されている漢字と、右記の範囲の漢字との間に、異形であっても、異体の関係が想定で

きる限り、右記の範囲の漢字に帰することとした。

一、人叵の二字は、字形に欠失があり、翻刻が不可能なため、そのまま記した。

〔配置について〕

一、（ ）のアラビア数字は丁数を、オは一丁の表面を、ウは一丁の裏面を表す。

二、文頭の（ ）は各丁の冒頭を、文末の（ ）は各丁の末尾を表す。

三、各行の字配りは、底本の各行に同じ。

四、〔 〕内の記事は図、欄外注、割注、朱注を表し、詳細を随時〔 〕内に示し、注の対象に該当すると思われる本文の箇所右傍に線を付した。図の配置は……で示した。

〔脚注について〕

一、脚注に、国会図書館蔵本『佛蹟誌』との、校合の結果を、〔国〕として表す。（校合に際し、両本に使用されている漢字の間に、異体の関係が想定できる限り、同一字母とみなした。）

二、脚注（ ）内に、翻刻者の注を示す。

當麻変相文亀中所摸

古図消損如石^{注1}湊行
更有餘文難見

西域記所出十指花文

華嚴相海品^{注3}曰
如來有大人相名曰
遍照法界海雲
如耒足下十輻輪
相輪種々莊嚴

[右 足 の 図]

[左 足 の 図]

^{注5}

觀仏三昧經曰足跟亦有梵王頂相

藥師寺^{注2}藥師仏足
長一尺八寸横七寸八分

- 1、湊行〔国〕旋形
- 2、藥師仏足〔国〕藥師寺佛足
- 3、（海以下十一字、国会本になく「華嚴諸説」とあり、貼付訂正の形跡があるが欠損）
- 4、（如以下七字、国会本になく、「董存其」とある。）
- 5、（国会本には、この丁に、貼付一葉あり。左足の仏足図と「出八事諦忍撰 善導大師行状記」とがある。）

(20ウ)

觀仏經一^{十一}左曰自有衆生樂觀如来足趺平正相又曰足指網
間如羅文相彩於其文間衆彩玄黃不可具名

上總州千田邑稱念寺無量壽佛像足下織文

稍似義楚六帖所記

一卍字

二花文

三網純

四宝劔

五雙魚

六通身

七花瓶

八雲

九月王

十千輻輪

十一象牙生花文

十二梵王頂

十三如山文

〔右足の図〕

〔左足の図〕

1、(国会本には、「第七花瓶文上
有一義楚所指如眼文便是」とあ
る。)

(20ウ)

南都薬師大寺佛跡縮写其相磨滅難了

〔右足の図〕

〔左足の図〕

観佛三昧經四^{十八}左曰足下千輻輪相中出大光明其光如華
 華々相次繞佛億匝同六^{十五}右曰佛舉足時足下千輻輪
 相一一輪相皆雨八萬四千衆宝蓮華華嚴^普三十三社^廿
 曰如来足下千輻相輪種々莊嚴放百千衆宝光明
 普照一切法界同^{十五}右曰如来足下千輻輪中有妙光明
 名普照王

當麻變相中宝螺稍似雲形故誤宝螺為雲

〔図〕

涅槃八^{十四}左曰虚空震雷起雲一切象牙皆生華

象牙

生花

文

〔図〕

千田像

或謂此

梵王頂

相

〔図〕

薬師寺佛跡如此^{廿一}

薬師寺佛跡

衆螺之相

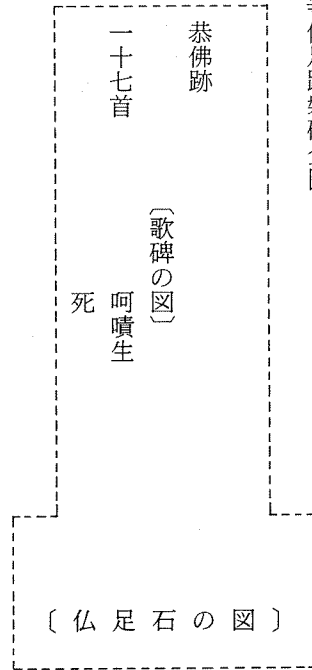
1、此〔国〕是

2、社〔国〕^{十三}右

3、幅〔国〕幅

(21ウ)

南都薬師大寺佛足跡磐碑全圖



以今量尺_レ度_レ之磐高一尺八寸餘平面縦二尺五寸横三尺二寸五分尊跡拇指至_レ跟一尺六寸中指至_レ跟一尺五寸小指至_レ跟一尺五寸指處橫量八寸中心橫量六寸跟處橫量五寸傍面勒_レ記文_レ碑高六尺餘廣一尺五寸餘厚一寸五分鐫_レ和歌二十一章_レ第二章歌編_レ拾遺集_レ紀文及和歌如_レ下所_レ註解_レ

1、(文、国会本でずれあり。)

2、(章、国会本でずれあり。)

3、編拾(国)編入拾

(21ウ)

(22才)

佛蹟誌

東都駒山西教寺沙門潮音編集

觀佛三昧經六_{左五}曰若有衆生佛在世時見_レ仏行者步々之中

見_三千輻輪相_一除_一却千劫極重惡罪_一仏去世後三昧正受想_レ仏行

者亦除_三千劫極重惡業_一雖不想行見_三佛跡_一者見_レ像行者步々亦

除_三千劫極重惡業_一

大哀經_{十三}右曰出_三入那國州城大邦縣邑聚落_一足不_レ踐_レ地千輻

輪文自然輪現柔軟殊妙香潔蓮華而現_三于地_一如未_レ之足踐_三於

其上_三其有_レ蟲蛾含血之類遇_三如未足_一晝夜七日而得_三安穩_一壽終

之後復生_三天上_一_{其功德如此諸經所說最多}

觀佛三昧經一_{十二}右曰觀如未脚指端螺文相_一如_三毘紐羯摩天所

畫之印_一自有衆生樂觀_一如未足下平滿不_レ容_三一毛_一足下千輻輪

1、蛾〔国〕蟻

2、此〔国〕是

(22才)

(22ウ)

相轂輞具足魚鱗相次金剛杵相者足跟亦有梵王頂相衆螺

不異如^は是名^は樂順觀音^{此經所說其相最分明}更出華嚴^{舊經卅三十二右}大集^{舊經}

十五大般若^{三百八十一}涅槃^{南本廿六北本廿九}仙本行室女所問^{初四}等經及智度

四十八^{廿二}瑜伽^{四十九等論}

貞元錄^{廿五}曰仙跡見千輻輪相^{出雜生七}經^{阿含}內典錄^{三十四}

宗叡請未錄曰仙脚跡真言一本^{梵字}二行^二仙千輻輪宗讚一本^{梵字}

行^六今世不傳觀世音寺資財帳^{詳書類從四百四十三卷所出}曰仙跡壹雙^{寬治六年所記云以紙圖裏青}

紙色

(23才)

法顯傳^{五右}曰^{鳥養}仙至^{北天竺}即到^此國^已仙遺^{足跡}於^此跡^一

或長或短在^人心念至^今猶尔^{廿一}曰^{阿育王最}此塔前有^仙脚

跡^{廿九}曰^{師子}仙至^其國^欲化^{惡龍}以^神力^一足躡^{王城}北^一足

躡^{山頂}而跡相去^{十五}由延於^{王城}北跡上起^{大塔}高^{四十}丈

師子國梵云^{僧伽羅}更^一轉^証今^稱錫蘭^{西域記}明朝增加文曰

今之錫蘭山即古之僧伽羅國也由^是視^之近世和蘭奴所談

錫蘭山仏足蹟全合^{法顯說}我邦有人^認錫蘭山為^靈

鷲山^者大誤矣

1、十二(国)十三

2、旧經(国)同

3、廿二(国)廿一

4、(国)廿六(行間注・廿二左)

5、(国)一卷

6、(雜、国会本では、「雜」を「増

一」と直す。)

7、(国)第四卷

8、(国・朱注)檢増一經四卷无文

(22ウ)

1、証(国)訛

2、視(国)觀

3、說我(国)說又合我(朱注に

よる。)

4、(国・朱注)貞元錄金剛智傳

5、人(国)人

西域記一右六曰東昭怛釐仏堂中有玉石一面廣二尺餘色

帶黃白狀如海蛤其上有仏足履之迹長尺有八寸廣餘八寸

每遇サマ有齋日照燭光明

二十三左曰那羅曷国影窟門外有二方石其一石上有如未足蹈

之迹輪相微現光明

(23ウ)

時燭三左二曰阿波羅龍泉西南三十餘里水岸大磐石上有如

未足所履迹隨入福力量有短長是如未伏此龍已留迹而去

後人于上積石為室遐迹相趨花香注2

「供養三三右三曰摩訶伐那伽藍西北下山三十四里至摩偷

迹唐言是佛昔蹈此石放拘胝光明照摩訶伐那伽藍為諸人天說

本生事四十劫比三寶階側精舍側有大石基長五十步高

七尺是如未經行之處足所履迹有蓮花之文八四摩竭陀

城摩子精舍中有大石如未所履迹猶存其長尺有八寸廣餘六

寸左右迹俱有輪相十指皆帶花文魚形映起光明時照告者

如未將取寂滅北趣拘尸那城南顧摩竭陀国蹈此石上告阿難

曰吾今最後留此足迹將入寂滅顧摩竭陀也百歲之後有無憂

6、右〔国〕左

7、遇〔国〕過

(23オ)

1、羅〔国〕邏

2、(朱の導線、国会本になし。)

3、亘〔国〕膏

4、十〔国〕十九

5、羯〔国〕竭

6、告〔国〕昔(静嘉堂本32オ

5行目の再引用には「昔」とあ

る。)

(23ウ)

(24才)

王^{阿育此}命^{云無憂}世建^此都君^此臨此地^此匡^此護^此三宝^此役^此使百神及無憂王
之嗣^此位也遷^此都築^此邑掩^此周迹石^此既近^此宮城^此恒親供養後諸國王
競欲^此舉^此婦^此石雖^此不^此大衆莫^此能轉^此近者說賞迦王毀^此壞^此佛法^此遂即^此石
所^此欲^此滅^此聖迹^此鑿^此已還平文彩如^此故于^此是捐^此棄^此號^此伽河流^此尋渡^此本
所^此八^此廿^此一^此曰^此摩揭^此陀^此國^此菩提樹北有^此仏^此經行之處^此如未成^此正覺^此已不^此起^此
于座^此七日寂定其起也至^此菩提樹北^此七日經行東西往來行十
餘步異華隋^此迹十有八文後人于^此此聖^此軌為^此基高餘^此三尺^此聞^此諸
先志^此曰^此此聖迹基表^此人命之修短^此也先發^此誠願後^此乃度量隋^此壽
修短數^此有^此增減^此九^此九^此曰^此摩揭^此陀^此國^此精舍東有^此長石^此如未^此經行所^此
履也^此九^此九^此曰^此同精舍東北澗中乃^此至其傍石上有^此仏^此脚迹^此輪
文雖^此暗規模可^此證^此十三^此曰^此伊^此憐^此摩^此多^此國^此藥叉故室次北有^此仏^此足蹟^此
長尺八寸廣可^此六寸^此深可^此半寸其蹟上有^此窰堵波^此

(24ウ)

慈恩傳^{二十五}左^此曰^此鳥^此伏^此龍泉西南三十餘里水北岸磐石上有^此仏
脚跡^此隨^此人^此福願量有^此修短^此是佛昔伏^此阿波羅邏羅龍^此時至^此此留^此跡
而去^此三^此九^此曰^此波^此陀^此次有^此精舍中有^此如未^此所^此履石^此々々上有^此佛
雙跡^此長一尺八寸廣六寸兩足下有^此千輻輪相^此十指端有^此萬字
花紋及瓶魚等皎然明著是如未將^此入^此涅槃^此發^此吠舍釐^此至^此此於^此

- 1、匡〔国〕匡
- 2、渡〔国〕復
- 3、所〔国〕處
- 4、已〔国〕已以下、両本とも、
已・己の差別は明確でない。
- 5、〔国会本で、乃至二字はやや斜
にずらす。〕
- 6、〔国会本にミツの振仮名あり。〕
- 7、拏伐〔国〕拏鉢伐
- 8、又〔国〕又

(24才)

- 1、如〔国〕所
- 2、々〔国〕石（以下、踊り字は、
国会本ではほとんど用いられない

河南岸大方石上立顧謂阿難此是吾最後望金剛座及王舍城所留乃跡也

續僧史四左曰他國有賢劫四佛經行石基長五寸許步高干

七尺尺註4踏所及皆有蓮華文生焉四左註伊羅有弘立迹長

尺八寸闊強六寸

釋迦方誌上左曰註4龍窟外方石有弘足跡輪相發光上註7曰

龍泉西南三十餘里水岸大石上伏龍已留迹註6之隋心長

(25才)

短中十六左註曰王城其側精舍中有大石是弘欲涅槃北趣拘尸

南顧摩揭註故蹈石上之雙跡也長尺八廣六寸輪相花文十指

各異近為羯羅拏蘇伐刺那言金耳國鼓償迦王言月也毀壞

仏跡註鑿已還平紋彩如故捐菟伽河中尋復本處中廿五左註曰驚

精舍東長石仏曾經行履之中左註曰廿五仏晒衣處旁有弘跡輪

文入石中右曰藥叉室北有立仏跡長尺八闊六寸餘深半

寸法苑珠林三十八坊本曰鳥枝那國有方石上佛足迹相放光照註寺

卅八坊本左註曰王塔佛入室精舍側註4仏經行石基長五寸步高七尺

足可履處皆有蓮華文卅八左註曰王塔其側精舍中有大

石是弘欲涅槃北趣拘尸南顧摩揭故蹈石上之雙足迹長尺

八寸廣一寸輪相華文十指各異近為惡王金耳毀壞弘迹註6鑿

い。

- 3、寸〔国〕十
- 4、尺〔国〕足
- 5、三〔国〕二
- 6、尔〔国〕示

(24ウ)

- 1、无〔国〕無（以下同じ）
- 2、城〔国〕塔
- 3、鼓〔国〕設
- 4、精〔国〕（欠損）
- 5、寸〔国〕十
- 6、〔国会本に、長尺以下二五字なし。但しその部分を含む25才2行から25ウ3行までを別紙で貼付する。廣一寸を廣六寸とし、図一字欠損〕

(25才)

(25ウ)

己還平文彩如_レ故乃捐_二菟伽河_一中尋復_二本処_一貞觀二十三年有
使圖_一寫迹_二未卅九坊本_一伊瀾_二四石_一曰_三拏國_一有_二仏立迹_一長尺八寸強濶六

寸

義楚六帖一廿五右曰西域記云仏在摩竭陀国波咤離城石上印

留跡記 契法師親禮聖迹自印將奉今在坊州玉華山鑄碑記
之讚云萬代金輪我仏尊遺留聖迹化乾坤慈悲因地修行力

感果親招千輻輪其仏足五足指端有_三卍字文_二相次各有_三如_レ眼

又^三又^二又^三又^二當指間各有網繞，中心上下有通身文。一指下有宝劒，又^三又^二當指下有雙魚王紋。次指下有宝花瓶文。次傍有螺王

文脚心有_二千輻輪文_一下有_二象牙文_一上有_二月王文_一跟有_二梵王頂

文
一
其初最久

- 1、彩〔国〕采（以下同じ）
- 2、廿五〔国〕廿三
- 3、又〔国〕（なし）
- 4、又〔国〕（なし）
- 5、其初〔国〕記讀

(25ウ)

(26才)

校同異

觀仏三昧經四相紀文引經開衆龜不異以為五相

千輻輪相轂輞具足

魚鱗相

金剛杵相

梵王頂相衆螺不異

釋迦方誌法苑珠林出三二相

輪相

花文

千田像十三相如上

所明

西域記出三二相

輪相

十指花文

魚形

義楚六帖出三十二相

五指端卍字文

次如眼

指間網繞註

慈恩傳出三三相

千輻輪相

十指端萬字

花文

瓶

魚

1、繞(国)純

(26才)

(26ウ)

藥師寺仏跡雖存_レ十指
花文通身文魚王華瓶
月王輪相梵王頂衆螺
之相_レ磨滅難了西域記
及藥師寺仏跡十指花
文慈恩傳義楚六帖為
萬字_レ慈恩傳別有_レ花文
千田像指花文餘四
指萬字義楚所_レ記螺王
文千田像作_レ雲形_レ觀
經所_レ說金剛杵義楚六
帖及千田像為_レ宝劍_レ觀
仏經說_レ衆螺不異_レ當_レ藥
師寺仏跡如_レ蔓草_レ文_レ故
不_レ同_レ義楚所_レ記螺王_レ文
其餘存没各不同

(27才)

南山三宝感通錄_一左_二曰阿育王寺東南三十五里山上有_三仏

(欄外頭注・石恐右矣)

石足跡_一寺東北二里山頭有_二仏左足跡_一所現_三于石上_二莫_レ測_一其

先_二同_一二_三唐蜀川簡州三学山寺有_三仏跡_一常有_二神燈_一自_レ空而

現每夕常爾齋日則多_一同_二二_三唐渝州相思寺_一比_レ珠_レ林_レ作_レ北

石山有_二仏跡十三故_一皆長三尺許濶一尺一寸深九寸中有_二魚

文_一在_二佛堂_一比_レ珠_レ林_レ作_レ北_一十餘步_一見有_レ僧住貞觀二十年十月忽於_二

中心上下通身文
大指下宝劔
二指下雙魚文
次指下宝花瓶文
次傍螺王文
脚心下千輻輪文
下象牙文
月王文
楚王頂文

(26ウ)

1、(国会本に欄外頭注なし) 石
(国) 右

2、比(国)(なし)(以下同じ)

3、作北(国)作北字(以下同じ)

寺側饒亦泉內出蓮華形紅色鬚臺具足大如三尺面合擊出

如涕入水成華舟織往還無不歎訝經月不滅相思寺因以名

之一云涪州亦有此寺本貧煎由是感施至今常富統僧史卅

五左所記曰涪州相思寺在涪州上流大江水北崖側有銘方五

尺許踏石如泥道俗敬重

三宝感通錄二卅三左曰唐循州東北興寧縣靈龕寺北石上仏跡

(27ウ)

三十餘大者五尺以下循州一川中東西二百南北百里寺極

豐渥近得銅藏面三尺爐可獲百餘諸盤合等又其銘云僧得

福興俗得禍至古傳云晉時比僧在此山隱遊大洪嶺至仏跡處

有大石窟華果美茂遂住經宿山神為怪怖之心卓不動曰此

不可居山鬼數未望前石山陵雲概曰遂往登之下望懸絶不可

可至彼還興寧說之宋代二僧承前不達勇意覆尋其僧誦法

華經戒行貞潔能伏神鬼乃至見形受戒爰及家屬望前崖上

有異光彩隔一丈許上下俱絶僧以木為梁度視乃見奇跡七

枚色如人肉現于石上貞觀三年又現一跡並放光明輪相具

足今有看者多少不同因置靈龕厥取其異又訪其本宋時王

家捨栗園為寺即今古堂尚存云

4、故(国)枚

5、織(国)織

6、施(国)施

1、餘(国)(欠損)

(27才)

続僧史卅六^{十七} 左曰秦州永寧寺於_レ塔上刹柱之前見_二大人跡_一長

(28才)

尺二寸陷深二分指螺文円相周備推无蹤緒蓋神瑞也

宋僧史廿六^{十六} 右曰釋惟実姓湯氏富陽人其爲_レ人也杜多其_一行

禪觀其心淡然靜居長座不_レ寐初母氏抑_二其顧心_一不_レ容_二披削_一既

而籠開_テ鳥逝_キ岸穴泉飛_フ学_ニ善財之遍参_ニ同_ニ迦葉之練行_ニ天寶中

往_二明州若嶼山_一夜聞_ニ冥告_一曰達蓬聖迹名山宜矣翌日旦登_二其

山_一巖洞窺窕石壁削成秀異之多実_ニ維_レ靈境有_二大佛足跡_一詢_二其

山叟_一則曰彼_レ開元年中始現_ニ斯瑞_一遂願棲_レ此有_二終焉之志_一時屬_二海

(欄外頭注・元疑无字誤)

寇_ニ袁晁蜂蟻屯聚_一分以_二剽劫_一殺_ニ戮元辜_一至_二于香山_一衆皆奔竄ス実

據_レ楊瞑目先以_二大石_一掩_ニ洞門_一賊可_二三二百數復昇巨石闊二丈

餘鎮其穴口夷起暗鳴以_レ掌拳_ニ之_一郡盜羅拜以謝_レ之而去邑民

重之遂立_二精舍_一弗_ニ再歲_一而成大曆八年也太守裴徽奏請署香

山題額焉詔度僧七人隸名矣以_二貞觀二年冬_一示_レ病終_ニ于寺_一則

(28ウ)

跏趺而化春秋六十二法臘三十一矣

(27ウ)

1、(国会本では、ここに、貞元録を引用し、欄外に付す。静嘉堂本では32ウに同文を引用。国会本のその箇所では部分を引用している。)

2、(欄外頭注国会本になし) 元

(国) 無

3、之郡(国)(欠損)

4、観(国)(観を訂正して) 元

5、病(国) 疾

(28才)

1、化春(国) 化也春

佛祖統紀四十終曰則天朝大足元年成州言有仏跡見ル甚大詔

改號大足舊唐書新唐書曰長安元
年正月丁丑改元大足

東坡志林十一左曰紹聖元年十月十二日与幼子過白水仏迹

院浴於湯池水涯有巨人跡數十所謂仏蹟也

(29才)

附録

三寶感應錄二册左四曰唐顯慶四年撫州史祖氏為元旱請祈无

効有レ人於州東山見有行像莫測其由將事移徒鏗然不レ動風

声扇及遠近同趣有潭州人云彼寺失レ之乃在此耶尋其行路

乃現二跡各長三尺相去五百里刺史以元災既久便往祈請

盡州官庶香華歩往二十里許泣告情事勤至弥甚使三人年捧

レ之飄然應接返還州寺随路布雲當夕滂下遂以有年今在撫

州云

法苑珠林廿一曰東晉孝武寧康三年四月八日襄陽檀溪

寺沙門道安盛德昭彰檀聲宇内於郭西精舍鑄造丈八金銅

无量壽佛明年季冬嚴飾成就晉鎮軍將軍雍州刺史郗恢之

創莅襄部贊擊福門其像夜出西遊萬山遺示一跡印文入石

2、(国会本では、ここに、東坡志

林を引用し、佛祖統記の引用以

下四行を貼付する。東坡志林は

同文が重複する。)

3、止(国)正

(28ウ)

(29才)

(29ウ)

郷邑道俗一時奔走驚嗟迎接還_レ本供養後以其名出住寺門衆咸駭異恢乃改_ニ名金像寺_一

佛蹟誌終

(30才)^{注1}

此紀文距今千有餘歲_ニ字多磨滅古人雖_ニ百計勞心讀_レ之不_レ校_ニ諸文_一故所_レ悞不少音今考_ニ觀佛經西域記慈恩傳釋迦方誌法苑珠林等_一更讀_ニ數字難_レ了者_一雖_レ然亦有_ニ二三字難_レ了者_一且閣_レ之俟_ニ後人之所補_一而已

釋迦牟尼佛跡圖

(欄外頭朱注・字々皆从鐫_{注2} 文華體後人_{注3} 勿蓋改)

(朱注・方字改是立字鐫誤)

案_ニ西域傳_一云今摩揭陀國昔阿育王_レ精舍中有_ニ一大石_一有_ニ佛跡_一各長一尺八寸廣六寸輪相花文_{注4}十指各具是佛

(朱注・因方誌珠林文更考此字形)

(29ウ)

1、(国会本では、ここに、白紙一丁と、「佛足跡紀文和歌畧註」を題とする一丁をはさむ。)

2、(国会本では、體をみせけちにし、々を傍に付す。)

3、華(国)筆

〔欄外頭注・紀文左右有二神像其相磨滅彷彿難見疑〕
是梵天王執金剛神過去發誓護正法者如寶積經所說

欲_レ涅槃_二北趣_一拘尸_二南望_一王城_二足所_一踏處。近爲_レ金耳國商伽王
不_レ信_二正法_一毀_二壞佛跡_一鑿_二已還平文彩如_レ故乃捐_二於河

〔朱注・字畫如是〕

中_二尋復_一本處_二今現_一圖寫所_二在流布_一觀佛三昧經曰
若人見_二佛足跡_一內心敬重無量衆罪由皆滅_ス除_二值遇_一字欠
非_二有_レ幸_一之所_レ致乎又北印度烏仗那國東北三百六十里

(30ウ)

入_二大山_一有_二龍泉_一可源春夏含_レ凍晨夕飛_レ雪有_二暴惡

〔朱注・因方誌文更考字形〕

〔朱注・四字今考如是〕

龍常雨水災アリ如未往化令_二金剛神_一以杵擊_二崖龍聞心
怖歸_二依於佛_一恐_二惡心起_一留_レ跡示_レ之於_二泉南大石上_一現_二其
跡_一隨_二心淺深_一量有_二長短_一今丘慈國城北四十里寺佛堂

〔欄外上朱注・往当作住〕

〔朱注・欠一字〕

中玉石之上亦有_二佛跡_一齊○日放_レ光道俗至時同往

修觀佛三昧經佛在世時若有_二衆生_一見_レ佛_一行者及

4、具〔国〕異

5、〔欄外頭注は、国会本では脚注〕

6、其〔国〕具

7、是〔国〕此

8、〔字欠、国会本では朱注〕

9、三〔国〕二

(30オ)

1、〔以杵擊の三字へ導線〕〔国〕

〔以杵擊崖の四字へ導線〕

2、〔四字 崖龍聞心を指す〕

3、〔欄外上朱注国会本になし〕

見ニ千輻輪 相即除ニ千劫極重惡罪ニ佛去レ世後想
レ佛行者亦除ニ千劫極重惡業ニ雖レ不想行ニ見ニ佛迹ニ者見
レ像ニ行者歩ノ之○中亦除ニ千劫極重惡業ニ觀ニ如來
足下平滿ニ容ニ一左足下千輻輪相轂輞具足魚鱗相次ニ
金剛杵相足跟亦有梵王頂相ニ衆鱗ノ之相不レ異諸惡
是爲祥

〔朱注・或謂休祥 後漢書桓帝紀曰蠲除貧穢以折休祥又曰君道得於下則休祥著於上〕

(31才)

文室真人淨三

大唐使人王玄策向中天竺
為國中轉法輪 向見レ
跡得ニ轉寫塔ニ是第一本
日本使人黃書本實向ニ
大唐國於普光寺ニ得ニ轉
寫塔ニ是第二本日本在
右京四條坊禪院 向ニ禪
院壇ニ披見神跡ニ敬テ轉ニ寫
塔ニ是第三本從ニ天平勝
寶元年歲次己丑七月十五日ニ盡ニ

恭^註 伏願為

亡夫人從四位下
茨田郡主 法
名良式敬寫ニ
釋迦如來神
跡ニ伏願夫人
之靈駕遊ニ入
无勝之妙邦ニ
受^註入 道之
聖ニ永脫ニ有
漏ニ高證ニ无為ニ

(30ウ)

- 4、左〔国〕毛
- 5、〔欄外朱注〕〔国〕〔欄内朱注〕
- 6、除〔国〕條
- 7、於〔国〕乎

1、恭〔国〕黍

- 2、條〔国〕行
- 3、人〔国〕久

廿七日并十三箇日作了_ル檀
主從三位智努王以天平勝

同霑三界共
契一真

(31ウ)

寶四年歲次壬辰九月廿日

改書寫成_ル文室真人智努

畫師越田安方書寫

於石智努

人足仟

諸行无常

諸法无我

涅槃寂靜

(31ウ)

佛足跡紀文考證

駒山沙門潮音集錄

西域記八_{左四波陀}曰窣堵波側不遠精舍中有大石如耒所

履雙迹猶存其長尺有八寸廣餘六寸左右迹俱有輪相十指

皆帶花文魚形映起光明時照昔者如耒將取寂滅北趣拘尸

那城南顧摩揭陀蹈此石上告阿難曰吾今最後留此足迹將

入寂滅顧摩竭陀也百歲之後有无憂王之嗣位也迁都筑_宇邑

掩周迹石既近宮城恒親供養後諸國王競欲拏_持歸石雖不大

衆莫能轉近說賞迦王毀壞佛法遂即石所欲滅聖迹鑿已還

平文彩如_レ故于_レ是捐_ニ棄競伽河流_ニ尋復_ニ本處_ニ

慈恩傳_三左九波陀_左次有_ニ精舍中有如未所履石_ニ々上有_ニ仏

雙跡_ニ長一尺八寸廣六寸兩足下有_ニ千輻輪相_ニ十指端有_ニ萬字

(32ウ)

花文及瓶魚等皎然明著是如未將_レ入_ニ涅槃_ニ發_ニ吠舍釐_ニ至_レ此於_ニ河南岸大方石上_ニ立願謂_ニ阿難_ニ此是吾最後望_ニ金剛座及王舍城_ニ所留之跡也

釋迦方誌中_{十六}曰_前其側精舍中有_ニ大石_ニ是佛欲_ニ涅槃_ニ北趣_ニ拘尸_ニ南顧_ニ摩竭_ニ故蹈_ニ石上_ニ之雙跡也長尺八廣六寸輪相華文十

指各異近為_ニ羯羅拏蘇伐利那言_ニ金耳國_ト說償迦王言月也毀_ニ壞佛跡_ニ鑿已還平紋彩如_レ故乃捐_ニ兢伽河中_ニ尋復_ニ本處_ニ石紀文_{此文親勒}

法苑珠林三十八 曰_前其側精舍中有_ニ大石_ニ是佛欲_ニ涅槃_ニ北趣_ニ拘尸_ニ南顧_ニ摩竭_ニ故蹈_ニ石上_ニ之雙足迹長尺八寸廣六寸輪相

華文十指各異近為_ニ惡王金耳毀_ニ壞佛迹_ニ鑿已還平文彩如_レ故乃捐_ニ兢伽河中_ニ尋復_ニ本處_ニ貞觀二十三年有_レ使圖_ニ寫迹_ニ未_{貞觀}

乃捐_ニ兢伽河中_ニ尋復_ニ本處_ニ貞觀二十三年有_レ使圖_ニ寫迹_ニ未_{貞觀}

1、筑〔国〕築

2、近說〔国〕近者說

(32才)

1、利〔国〕刺

2、彩〔国〕采

3、何〔国〕伽

4、觀〔国〕元

5、(乃至の二字は、国会本では割

書き。静嘉堂本もやや斜めにす

らしている) (以下同じ)

6、(国会本は、佛以下33才西域

四十四 右曰金剛智至嚕阿那國乃至方至山頂尋求靈跡見一円石可高四五尺計方廣可有一丈佛之右足隱在石上見有損缺心即

(33才)

生疑謂之非是仏跡仰天號泣憶昔如未遂感五色雲現及有円光仏迹相輪分明顯現聞有言此真仏跡但為往代衆生將未業重留此跡耳聞已歡喜香花供養入定一日從定出已七日旋逸把石尋緣行道其仏迹外石上有數石蓋亦中然燈時有野人將甘蔗椰子椰子蕉子薯藥等未施和上時弟子見之四散奔走和上言曰北來供養非損汝輩便取所施与授三飯戒其野人將小石施仏跡上打碎取喫何謂如是損其心上云治心痛從此驗知仏跡漸損其上

西域記三 右曰烏仗那國周五千餘里乃至曹揭釐城東北行

二百五六十里入大山至阿波邏龍泉即蘇婆伐窣堵河之源

也派流西南春夏含凍晨夕飛雪雪霏五彩光流四照此龍者

迦葉波佛時生在人趣一名曰競祇深閑呪術禁禦惡龍不令暴

雨國人賴之以蓄餘糧居人衆庶感恩壞德家稅斗穀以饋遺

焉既積歲時或有連課競祇含怒願為毒龍暴行風雨損傷苗

稼命終之後為此地龍泉流白水損傷地利釋迦如未大悲御

世愍此國人獨遭斯難降神至此欲化暴龍執金剛神杵擊山窟

記の引用まで、補修製本の結果、解説が不可能

(32ウ)

1、波邏龍〔国〕波邏羅龍

2、術禁〔国〕術禁禁（二字目は

みせけち）

3、窟〔国〕崖

(33才)

(33ウ)

龍王震懼乃出歸依聞佛說法心淨信悟如未遂制勿損農稼
龍曰凡有所食賴收入田今蒙聖效恐難濟給願十二歲一收
糧儲如未含覆愍而許焉故今十二年一遭白水之災阿波邏
羅龍泉西南三十餘里水北岸大磐石上有如未足所履迹隨
人福力量有長短是如未伏此龍已留迹而去後人于上積石
為室遐邇相趨花香供養

慈恩傳^{二十五}曰烏仗那國阿波邏羅龍泉即蘇婆河之上源也

西南流其地寒冷春夏恒凍暮即雪飛仍含五色霏々舞乱如

雜華焉龍泉西南三十餘里水北岸磐石上有佛脚跡隨人福
願量有修短是佛昔伏阿波邏羅龍時至此留迹而去

釋迦方誌上^{廿七}曰嘗揭釐城東北二百六十里入大山至阿波

邏龍泉即前河源也派流西南春夏合凍晨夕飛雪佛昔化暴

(34オ)

龍金剛以杵擊嵯龍怖歸依請佛放雨乃許之令入收糧十二
年雨水災又泉西南三十餘里水北岸大石上佛伏龍已留迹
示之隋心長短

西域記^六曰^{屈支}東昭怛釐佛堂中有玉石面廣二尺餘色

帶黃白狀如海蛤其上有佛足履之跡長尺有八寸廣餘八寸每

(33ウ)

レ遇^註有^レ齋日^二照燭光明

觀佛三昧經六^{左五}曰若有衆生佛在世時見^レ仏行者步々之中

見千輻輪相除^二却千劫極重惡罪^一仏去^レ世後三昧正受想^レ仏行

者亦除^二千劫極重惡業^一雖^レ不^レ想行者見^二仏跡^一者見^レ像行者步々

亦除^二千劫極重惡業^一仏告^二阿難^一汝從^二今日^一持^二如耒語^一遍告^二弟子^一

仏滅度後造^二好形像^一令^二身相足^一亦作^二无量化仏色像及通身光^一

及畫^二仏跡^一以^二微妙絲及玻瓈珠^一安^二白毫處^一令^二諸衆生^一得^レ見^二是相

(34ウ)

但見^二此相^一心生^二歡喜^一此人除^二却百億那由他恒河沙劫生死之

罪^一

同^一右^二曰觀如^一耒脚指端文相如毘紐羯摩天所^レ畫之印^一自有^二

衆生^一衆觀^二如耒足下平滿^一不^レ容^二一毛^一足下千輻輪^一相轂輞具足

魚鱗^一相次金剛杵相者足跟亦有^二梵王頂相^一衆螺不^レ具^註如是名^二

衆順觀者^一

舊唐書百四十八^{右二}右率府長史王玄策使^二天竺^一同^二左^一曰偁

阿羅那順以^レ歸^註二十二年至^二京師^一太宗悅命^二有司^一告^二宗廟^一

新唐書二百廿一^{左八}曰貞觀二十二年遣右衛率府長史王玄

策使其國

1、遇〔国〕過
2、瓈〔国〕瓈

(34才)

1、具〔国〕異
2、二十二〔国〕(欠損)

同^{十九}左曰高宗又遣王玄策至其國摩訶菩提祠立碑焉

(35才)

注1

釋迦牟尼佛

慧苑音義一^{十四}右曰釋迦此云能仁牟尼寂默也

言具三業離於誼雜也

西域傳

法苑珠林百十九^{坊本}_{十二左}曰中天竺行記唐朝々散大

夫王玄策撰卅八^左曰玄奘至貞觀九年冬初方達京師奉詔譯經兼勅令撰出西域行傳一十二卷又曰依奘法師行傳王玄策傳及西域道俗住土所宣非无靈異勅令文学士等總^{註3}矣詳撰勒成六十卷號為西國志圖畫四十卷合成一百卷音曰中天竺行記西國志今皆亡失考紀文所引不似西域記文稍合釋迦方誌法苑珠林所引文應是因中天竺行記西國志文

摩竭陀国

慧琳音義廿^右曰此詛云善勝国或云无惱害国

(34ウ)

1、(□は朱で引かれている。以下同じ。)

2、(坊本、国会本で行間朱注)
十二(国)十三
3、矣(国)集

同六^{左九}曰中天竺境如耒於_二此國中示_三現八相成道_一有_二金剛座_一
菩提樹遊化聖迹多_二於諸國_一

(35ウ)

(35才)

阿育王

西域記八_{左二}曰釋迦如耒涅槃之後第一百有_二阿

輸迦王_一唐言无憂舊曰阿育王譌潮音曰從_二世流布言_一今用旧
称

方

方字當作立恐是碑匠所誤

精舍

苑音義二_{右四}曰藝文類聚云精舍者非_下以_二舍之精妙名

為_二精舍_上由_二其精練行者之所居故謂_三之精舍_一

長一尺八寸廣六寸

西域記一_{左六}曰屈支_左長尺有八寸廣除_下

八寸同八_{左四}曰摩揭_左長尺有八寸廣餘六寸同十_{左三}曰伊闐_左長

1、舊〔国〕（欠損）

2、除〔国〕餘

尺八寸廣可六寸深可半寸慈恩傳三左九曰鳥仗長一尺八寸

廣六寸統僧史四右卅曰伊彌長尺八寸濶強六寸釋迦方誌中

十六曰摩揭長尺八廣六寸同中右卅曰伊彌長尺八寸濶六寸餘

深半寸珠林卅八曰摩揭長尺八寸廣六寸同卅九曰伊彌

(36才)

弘長尺八寸強濶六寸許如是諸說不同量尺亦有差以今尺

度レ之拇指至レ跟一尺六寸中指至レ跟一尺五寸五分小指至レ跟

一尺五寸指處橫量八寸中心橫量六寸跟処橫量五寸

涅槃

琳音義廿五右二曰比翻為圓寂

拘尸

琳音義廿五左二曰拘尸那城梵語西國城名也唐云栗

草城在中天竺界周十餘里 音曰即是如耒涅槃之地

王城

西域記九十五右曰曷羅闍姑利呬城唐言王舍琳音義六

十曰古名王舍城即摩竭陀國之正中心

(35ウ)

金耳国

西域記五_{右三}曰東印度羯羅拏蘇伐剌那國唐言金耳

商迦王

西域記五_{右三}曰說賞迦王唐言月釋迦方誌中_{十七右}亦

言月慈恩傳二_{廿五}作日寫誤_{今文商迦王西域記慈恩傳作說}

音借字
通用

(36ウ)

觀佛三昧經

現本十卷東晉佛陀跋陀羅譯 經六_{五左}曰見

仏跡者見像行者歩々亦除千劫極重惡業乃至畫仏跡乃至
令諸衆生得見是相但見此相心生觀喜此人除却百億_{注一}那由
他恒河沙劫生死乃罪具ニ如ニ上所ニ引

北印度

舊唐書百四十八_{十一左}曰五天竺其一曰中天竺二曰

〔注〕・地各數千里城邑數百又曰北天竺

東天竺三曰南天竺四曰西天竺五曰北天竺○拒雪山_{注四}四周有
山為レ壁南面一谷通為レ門西域記二_左詳夫天竺之稱異議糾

1、田(国)由

(36才)

紛舊云ニ身毒ニ或曰ニ賢豆ニ今從ニ正音ニ宜云ニ印度ニ々々之人随レ地称
レ國殊方異俗遙拳ニ總名ニ語ニ其所ニ美謂ニ之印度ニ々々者唐言月々
有ニ多名ニ斯其一称言ノ諸群生輪回不レ息无明長夜莫有ニ司農^{サウ}其猶
白日ニ既隱宵燭斯繼雖有ニ星光之照ニ豈如ニ朗月之明ニ苟縁^マ斯致
因而誓月良以其土聖賢繼レ軌導^レ凡御^レ物如ニ月照臨ニ由ニ是義故

(37才)

謂ニ之印度ニ又曰五印度之境周九萬餘里

烏仗那國

西域記ニ終曰烏仗那國唐言^レ苑昔輪王之苑囿

也舊曰ニ烏孫場ニ或曰ニ烏皆茶ニ譌北印度境^{已下數行文組合上}
^{迎方誌}所引西域記三二釈^上
^上廿七^右文

龍

梵語雜名^{冊一}右曰龍梵云ニ曩誡

注1

金剛神

十誦律卅九^{十七}左曰密迹執金剛神雜阿含經五^{卅三}右曰

時有ニ金剛力士鬼^持ニ金剛杵^{猛火熾然清涼華嚴疏}會^本一下^{卅四}右
曰以下執持此杵^中守護^上故

2、(国会本で本文中にあり、静嘉堂本庫本と同文。)

3、通(国)(欠損)

4、二詳(国)一右曰詳

5、農(国)晨

(36ウ)

1、(国会本では、ここに、「暴蒲報切猛也」がある。)

杵十一 苑音義十一 左曰跋折羅此云金剛杵

丘慈國 釈迦方誌上十七 右曰屈支國即丘慈也西域記一左五 曰

屈支國舊曰龜茲城北四十里仏跡具如上所引舊唐書百四注
十八左九曰龜茲國即漢西域舊地也在京師西七千五百里其

(37ウ)

王姓白氏新唐書二百廿一上十三右曰龜茲一曰丘茲一曰屈茲
東距京師七千里而羸自焉耆西南步二百里度小山經大河
二又步七百里乃至橫千里縱六百里又曰姓白氏居伊邏廬
城

佛堂 梵語雜名冊九右曰仏堂梵云設怛縛矩里

齋日 十誦律六十一八云月六齋所謂八日十四日十五日

廿三日廿九三十日

2、(国会本では、ここに、「其国
地方出舊唐書百四十八左九新唐書
二百二十一上十三」とあり、静嘉
堂の舊唐書以下5行余は欄外頭
注としてある。)

(37オ)

觀佛三昧經

文出一^{十二}具如上所引

千輻輪相

琳音義廿六^{十四}左曰千輻輪相梵云斫訖羅此云輪

在如耒足下經云以如法財施衆生故得此相也同廿九^十右曰
輻音福案千輻輪相者唯仏身上福德円満之相現於六處二
手掌二足掌及二膝上肉文之中顯分明猶如車輪千輻具足

(38才)

經无量劫礼拝賢聖之功所感也

劫

苑音義一^四左曰劫梵言也具正云羯臘波此翻為長時也

足下平滿

是亦三十二相之一大般若八十一曰世尊足

下有平滿相妙善安住猶如奩底地雖高下隋足所踏皆悉坦
然无^レ不^ニ等觸

(37ウ)

穀輜貝足

琳音義廿九^上曰上音穀說文輜所湊也從_レ車從_レ

穀省聲下音罔說文車輜也輜頭四角盤木相接為_二環也

梵王頂相

華嚴清涼疏^會本一下^{六十二}左曰尸棄天王此云持髻謂

此_レ梵王頂有_二肉髻_一似_二螺形_一故亦名_二螺髻_一

注_一

衆蠡

琳音義十二^五左曰螺廬和及俗字也正體作羸經中或

有作蠡音礼皆非羸字也堂廿七^七螺水蟲正作羸堂廿九

十七^七左曰羸魯戈反郭注尔雅云羸蝸牛也 音案現流經文作螺

(38ウ)

紀文作_レ蠡古未通用今檢_二尊跡_一如_二蔓艸文_一則似_二蝸牛形_一跟處左
右及下圍_二梵王頂_一故云_二衆蠡_一

不異

經一^{十二}右曰足跟亦有梵王頂相衆螺不_レ異謂足跟全現_二

1、(国会本では、ここに、静嘉堂

本38ウ引用の文室真人の記事
の一部分と同文を重複して引用
する。)

2、及(国)反

(38才)

梵王頂相螺文圍繞皆不異梵王頂也

文室真人淨三

續日本紀十八^{十五}右曰天平勝宝四年八月乙

丑從三位智努王等賜文室真人姓同十三^左作茅野王同十^左
四作知努王同十九^左作珍努皆和読野轉也同廿三^左十九曰天
平宝字五年正月戊午授從三位文室真人淨三正三位同廿
五^左曰天平宝字八年正月乙巳授正三位文室真人淨三從
二位又廿五^左天平宝字八年九月戊戌御史大夫從二位文
室真人淨三致仕同 曰宝龜元年十月丁酉從二位文室真
人淨三薨一品長親王之子也歷職内外至大納言年老致仕

(39才)

退居私第臨終遺教薄葬不受鼓吹諸子遵奉當代称之遣使
予賻之

大唐使人王玄策

法苑珠林卅八^{十四}右曰依王玄策傳曰此漢

使奉勅往摩竭陀国摩訶菩提寺立碑至貞觀十九年二月十

1、同〔国〕なし。(十以下八字
国会本で注3の左傍に注として
ある。)

2、四作〔国〕四七作

3、(皆以下六字国会本になし。前
掲の重複部分にはある。)

4、左〔国〕右

5、左^十〔国〕^十左

(38ウ)

1、予〔国〕弔

一日於菩提寺^註下塔西建立使典司門令史魏才書同卅九
 又依往玄策傳曰粵以大唐貞觀十七年三月內爰發明詔令^下
 使人朝散大夫行衛尉寺丞上護軍李義表副使前融州黃水
 縣令王玄策等送波羅門客還國其年十二月至摩竭陀國因
 即巡省佛鄉覽觀遺蹤聖迹神化在處感徵至十九年正月廿
 七日至王舍城遂登耆闍崛山流目縱觀傍眺罔極同卅一^註
 曰於大唐顯慶年中勅使衛長史王玄策因向印度過淨名宅
 以笏量基止有十笏故号方丈之室也音案玄策使天竺國

1、寺(國)樹
 2、一(國)八

(39ウ)

兩回一以貞觀年^{太宗}一以顯慶年^{高宗}珠林不記東歸之年
 更如珠林云貞觀廿三年有使圖寫迹未不指玄策名舊唐書
 百四十八^左曰玄策俘阿羅那順以帰二十二年至京師太宗
 大悅命有司告宗廟新唐書二百二十一^左曰貞觀二十二年
 遣右衛率府長史王玄策使其國蓋兩唐書舊以廿二年為使
 彼國年^上新為至京師^上年珠林所記廿三年圖寫未皆所傳之差
 耳

(39才)

中天竺 具如上所引舊唐書

轉法輪

涅槃經南本十三右曰善男子諸佛世尊皆只有三所說一皆

悉名法轉法輪也善男子譬如聖王所有輪宝未法降伏者能令法降
伏已降伏者能令法安穩善男子諸仏世尊凡所法說法又復如法是
无量煩惱未法降伏者能令法調伏已調伏者令法生善根善男子壁

(40才)

如聖王所有輪宝則能消滅一切怨賊如未演法亦復如是能
令一切諸煩惱賊皆悉寂靜復次善男子譬如聖王所有輪宝
下上廻轉如未說法亦復如是能令下趣諸惡衆生上生天上
乃至佛道音曰如未所說名轉法輪故号說經地呼曰轉法
輪處

日本使人黃書本實

日本紀廿七左曰天智天皇十年三月

戊戌朔甲子黃書造本実献水臯 同廿九左曰天武天皇十
二年九月丁未賜姓曰連 同卅右曰持統天皇八年三月乙
酉以黃書造本実等拜鑄錢司統日本紀作黃文連本実
和読互通 此人使大唐至普光寺古書无載焉

1、只〔国〕凡

2、名轉〔国〕名為轉

3、降〔国〕調

4、壁〔国〕譬（以下同じ）

(39ウ)

1、有〔国〕（欠損）

2、生天上〔国〕生人天

1、甲〔国〕庚

2、〔国会本では、同以下、乙酉ま

普光寺

統高僧傳十五十五 京師普光寺曇藏傳曰貞觀訳経

又召為證義又曰度人三千并造普光寺同十七十七 京師普光

(40ウ)

寺法常傳曰貞觀之訳證義所資下勅徵召恒知翻任後造普光宏壯華敞又召居之佛祖統記四十十六 曰貞觀五年詔以慶善宮為穆太后建慈德寺為皇太子承乾建普光寺勅沙門法常居之為太子授菩薩戒

搭

託た蓋切音搗た摸搭也

右京四條坊禪院仏跡

統日本紀一九 曰道昭和尙孝德天

皇白雉四年随使人唐又曰還歸本朝於元興寺東南隅別建禪院而住焉又曰後迁都平城也和尙弟及弟子等奏聞徒建禪院於新京今平城右京禪院是也三代実録卅二 曰元慶元年十二月十六日壬午以禪院寺為元興寺別院禪院寺者

(朱注・天智天皇元年)

でを記した別紙が付され重複している。

3、造〔国〕連

4、記〔国〕紀

(40才)

5、〔国会本の貼付訂正の下の記事には「韻會曰」とある。〕

6、搗摸〔国〕搗摸

遣唐留学僧道昭還此之後任成三月創建於本元興寺東南隅和銅四年八月移建平城京也 音曰此寺今廢

注1

1、(国会本では、ここに、「仏跡無知其處」がある。)

(40ウ)

(41才)

天平勝宝元年己丑

孝謙天皇即位年

檀主

梵云陀那鉢底訳為施主陀那是レ施鉢底是主而云檀

越者本非正訳略去那字取上陀音轉名為檀 今謂梵漢並拳故云檀主

從三位智努王

続日本紀十七日天平十九年正月丙申

授正四位上智努王從三位 音謂文室真人浄三称智努王具如上所明

注1

天平勝宝四年歲次壬辰

孝謙天皇御宇

1、(国会本では囲みなし。)

畫師越田安方

此人諸記无_レ所_レ考

亡夫人從四位下茨田郡主法名良式

此人亦无所考茨田

郡屬河内州法名國清百錄_{隋朝}四_初曰勅度四十九人法名

無勝之妙邦

涅槃經_{南本}廿二十八_左曰善男子西方去此娑婆世

(41ウ)

界度三十三恒河沙等諸仏国土彼有世界名曰無勝_{注1}彼土何
故名曰無勝其王所有莊嚴之事悉皆平等无_レ有差別_{注2}猶_{注2}西方
安樂世界亦如東方滿月世界我於彼土出_レ現於世為_レ化衆生
故於此界閻浮提中現_レ轉法輪_{注1}非但我身獨於此中現_レ轉法輪_上
一切諸仏亦於此中而轉_レ法輪_{注1}

有漏

俱舍論_左一三曰諸漏於中等隨增故頌疏一_{四十}左曰漏謂

煩惱世過無窮煩惱名漏

2、左〔国〕右

(41才)

1、王〔国〕土

2、猶西〔国〕猶如西

無為

涅槃經南本五四曰善男子積集有二種一者有為二者

無為有為積集者即声聞行無為積集者即如來行 音曰佛

果無有為作故云無為

三界

欲界色界无色界謂之三界具如俱舍八初等明

一真世起信論曰唯一真如又曰唯一真心無所不遍此謂如

(42才)

未廣大性智究竟之義

諸行無常諸法無我涅槃寂靜

一切有部毘奈耶九七曰於

世尊所深生敬信世尊即為說三句法告言賢首諸行皆無常。

諸法悉無我。寂靜即涅槃。是名三法印。是時大會各生希有

智度論廿二曰何等是佛法印答佛法印有三種一者一切

有為法念念滅皆無常二者一切法無我三者寂滅涅槃

成實論一廿四曰佛法中有三法印一切無我有為諸法念念無

3、(国会本に囲みあり。)

(41ウ)

常寂滅涅槃是三法印一切論者所不能壞以真実故^{註1}潮音
謂以此換世上印璽是如乘法印故更取一切不能壞義以祝
不巧事應知

(42ウ)

(白紙)

(43才)

南都薬師大寺佛足蹟碑文和歌略註

東都駒山沙門潮音集録

恭佛跡

一十七首

(註1)

美阿止都久留^{印尊}

伊志乃比鼻伎波^{石之}

阿米尔伊多利^{當徹天}

都知佐閑由須礼^{地動}知々波々賀多米尔^{為父母}

毛呂比止

乃多米尔^{為諸人}

玄奘三藏仏跡讚曰遺留聖迹化乾坤

方等泥洹經下^{廿二右}

曰世雄以足蹈門闢則動天地至六返瑜伽論四十九^右

曰於其父母種々供養於諸有情諸苦惱事種々救護由往

来等動轉業故感得足下千輻輪相音曰以如来因行況

1、(国会本では、空白なし。)

(42才)

(42ウ)

1、(以下、歌に付した番号は朱の丸に囲まれている。国会本にはない。また、国会本では、歌の万葉がなにかタカナをふる。その上に重ねて朱で漢字の意味の注をほどこす。へ静嘉堂本の割書きと同文)以下同じ。)

今功德_二故有_二此言_一

(二) 弥蘓知阿麻利布多都乃加多知夜蘇久佐等曾太礼留比止

(43ウ)

(欄外頭注・新撰字鏡曰跡阿止々)乃具足三十有二相_{八十種好人}布美志阿止々已呂_{所履跡}

麻礼尔母阿

留可毛_{希有哉}

涅槃經_{南本}卅五_左曰其身具足三十二相八十種好_{西域記}

四十九_右曰_{他國}劫比如未經行之処足所履迹有蓮華之文_{一雜}

阿含經_{四左}廿四曰我未_四曾見_三人間有_二如是足跡三十二相八十

種好具如_三大般若_注方廣莊嚴經勝天王經瑜伽論出_一

(三) 与伎比止乃_善麻佐米尔美祁牟_{正眼}美阿止須良乎_{聖和礼}

波衣美須弓_{我不得見}伊波尔惠利都久_{石影}多麻尔惠利都久_{五影}

觀仏經_{六左}五曰若有_二衆生_一佛在世時見_レ仏行者歩々之中見_二

千輻輪相除却千劫極重惡罪_一後分涅槃經下_{十一}曰悔過_左

世尊大慈悲示_レ敬千輻輪光足哀哉今遇_二輪光相_一自_レ此當何

復再觀_一西域記_{一右}曰屈支国東昭釐仏堂中有_二玉石_一面

(44才)

廣二尺餘色帶_二黃白_一状如_二海蛤_一其上有_二仏足履之迹_一

2、尊(国)聖
3、右(国)左

(43才)

1、(国会本では、大般若の下に三百八十一をみせけちにする。)

(43ウ)

〔四〕

己乃美阿止此聖迹夜与呂豆比賀利乎波奈知伊太志放出八萬光明
毛呂毛呂須久比和多志多麻波奈濟度衆生須久比多麻波奈
之救

仏跡放_二出八万光明_一未詳_二実拠_一觀无量壽經曰八万四千
相各有_二八万四千随形好_一一一好復有_二八万四千光明_一一一
光明遍照_二十万世界念仏衆生_一攝取不_レ捨音謂此經乃說
弥陀光明諸仏平等故轉用以讚_二祇尊足跡_一乎後文涅槃
下_レ曰千輻輪中放_二千光_一遍照_二十万_一普_二仏利_一又曰輪光普救_二
諸惡趣_一又曰足光平等度_二衆生_一

〔五〕

伊可奈留夜比止尔伊麻世可伊波乃自閑乎都知布美奈
如何乎人跡
石上如泥阿止乃祁留良牟遺跡多布刀久毛阿留可哉尊

2、利〔国〕刹

〔44ウ〕

續僧史卅五左无相師傳曰相思寺有佛迹相去九尺長三
尺許踏石如泥西域記八_左四曰告阿難曰吾今最後留此
足迹將入寂滅

〔六〕

麻須良乎乃須々美佐岐多知布賣留阿止乎丈夫先
進履迹美都
々志乃波牟多太尔阿布麻弓尔見而戀慕現前
當来必值遇麻佐尔阿
布麻弓尔

涅槃經本南十六十一左曰号佛調御丈夫 西城記三二左曰阿波

邏龍泉西南三十餘里水岸大磐上有如耒所履迹 首楞

嚴經唐勢至章曰現前當未必定見仏

〔七〕麻須良乎乃布美於祁留阿止波丈夫之伊波之字閑尔石伊

麻毛之已札利今猶美都々志乃霸止見而信之 奈賀久志乃霸

止長倍

1、倍〔国〕信

〔44ウ〕

〔45才〕

西域記八四右曰如耒所履雙迹猶存石上之言如前所引西

域記二左

〔八〕已乃美阿止乎多豆祢毛止米弓尋求此尊跡与伎比止乃伊麻須

久尔々波和札毛麻胃弓牟我將衆生利善人所在国毛呂毛呂乎為弓

雜阿含經四廿左曰有豆磨種姓波羅門随彼道行尋佛後未

見佛脚跡千輻輪相印文顯現寶円輞衆好満足見已テ作

是念我未曾見人間有如是足跡今當随跡以求其人即尋

脚跡至於仏所 无量壽經論曰普共諸衆生往生安樂国

〔九〕舍加乃美阿止釈迦之伊波尔宇都志於伎宇夜麻比弓磐石

敬乃知乃保止氣尔由豆利麻都良牟欲讓呈後仏 佐々義麻宇

佐牟

1、利〔国〕到

2、〔国会本では、寫をみせけちに

し、傍に摸と直す。以下同じ。〕

3、丁〔国〕下

弥勒^{注3}丁生^{注4}經^{注4}曰大師^{釋尊}所授記當乘佛下生彼号为慈氏^一

(45ウ)

慈氏梵云弥勒 音曰後佛者正指弥勒 弥勒成佛經^{十八}曰摩訶

迦葉從滅盡定覺乃至持釈迦牟尼佛僧伽梨授与弥勒 音謂以此仏蹟比況彼故有此語言

[十] 己礼乃与波宇都里佐留止毛^{難此世}止己止婆尔^{住常}佐乃己^{注去}

(朱注・旧本及松本无)

利伊麻世^存乃知乃与乃多米^{為後世}麻多乃世乃多米^{為未世}

涅槃經^南本^{二六}曰一切諸世間生者皆歸死乃至一切皆迁

滅又二^{右四}曰惟速諸佛久住於世間利益无量衆

(朱注・松本无)

[十一] 麻須良乎能夫美阿止^{此歌剝落}

[十二] 佐伎波比乃^{福業}阿都伎止毛加羅麻為多利弓^{厚輦}麻佐米^{參之}

尔弥勒牟^{正眼}比^{古人就為}止乃止毛志^{字缺}宇礼志久毛^{阿字今改}

(注・留可) (朱注・旧本及松本)

阿○^{注3}觀喜哉^{注4}

後分涅槃經下^{十一}曰哀哉今遇輪足光自^レ此當何復再見

4、左(国)右

(45才)

1、(朱注は、国会本になし。以下
同じ。)

2、(留可、国会本では本文)

3、又(国)人

4、觀(国)歎(以下同じ。)

(45ウ)

(46才)

觀仏經六_右曰畫仏跡乃至令_下諸衆一生得_上見此相心生觀喜

十住論五 曰仏足千輻輪柔軟蓮華色見者皆觀喜頭面

礼仏足

(十三)

乎遲奈伎夜和礼尔於止礼留比止乎於保美_{慙怯而劣}和多
佐牟多米止_為度宇都志麻都礼利_奉摸都加閑麻都礼利_奉摸事

觀仏經六_右六曰畫_二仏跡_一乃至令_下諸衆生_二得_上見_二是相_一乃至此人

除_二却百億_一奈由他恒河砂劫生死之罪_一

(十四)

舍加乃美阿止_{歡迎之}伊波尔宇都志於伎_{摸留}由伎米具利_{行道}施繞宇夜麻比麻都利_{敬奉}和我与波乎閑牟_{盡我此世}己乃世波

乎閑牟

尊勝陀羅尼經_{仏陀説}十九_右曰合掌恭敬旋繞行道帰依礼拝

西域記 曰致敬之式乃至隨_レ所_二宗事_一多有_二旋繞_一或唯一周_特

(46ウ)

或復三匝

(十五)

久須理師波都祢乃母阿礼等_{難有尋}麻良比止乃伊麻乃久

須理師_{今之多布止}可利家利_尊米太志可利鷄利_珍

涅槃經_南本一一_右廿四_特曰辟如_二國王_一闇鈍少智有_二一_一醫師_一性復頑嚚

而王不_レ別厚賜_二俸祿_一療_二治衆病_一純以_二乳藥_一亦復不_レ知_二病起_一根

源雖_レ知_二乳藥_一復不_レ解_二風冷熱病_一一切諸患_一乃至復有_二明医_一曉

1、奈(国)那

2、砂(国)沙

3、唯(国)惟

1、利(国)理

2、(国会本では、奇をみせけちに

し、傍に珍と直す。)

3、廿四(国)廿三

4、不解(国)不善解

5、(国会本では、麻婆利を重ねて

(46才)

八種術^ニ善療^ニ衆病^ニ知^ニ諸方藥^ニ從^ニ遠方^ニ未^ニ乃至客醫^ニ即為^レ王說
種々^ニ醫方及餘技藝^ニ乃至佛世尊亦復如^レ是為^ニ大醫王^ニ出^ニ現
於世^ニ降^ニ伏^ニ一切外道邪醫^ニ

〔十六〕己乃美阿止乎^{注5}麻婆利麻都^{注6}禮婆^{於此尊跡}阿止奴志乃^{跡主}
多麻乃与曾保比^玉於母保由留可母^{可想}美留期止母阿留^{像哉}

(47才)

可^{亦當有}
見者

注1

旋繞如前出 玉貌未詳所據

〔十七〕於保美阿止乎^{大人}美尔久留比止乃^{尊跡}伊尔志加多^{去過知}

与乃都美佐閑^罪保呂夫止曾伊布^久乃曾久止叙伎^{滅除}

(朱注・旧本及松本)

ク久字 缺字

續僧史卅六^{十八}右智教傳曰秦州之永寧寺於塔上刹柱之前
見大人跡長尺二寸觀佛三昧經^{左五}曰見仏跡者見像行

者歩々亦除千劫極重惡業

呵噴生死

〔十八〕比止乃微波^{身人}衣賀多久阿礼婆^難乃利乃多能^{注4}与須加止奈

礼利^{為成法}田寶糧都止米毛呂^{諸衆生}須々賣毛呂母呂

二度書き、後の三字を貼紙に
よつて隠し、「闕字ニアラス」と
ただす。

6、(国会本には、玉貌に對し「未
得処挺」の注がある。)

(46ウ)

1、(国会本では、ここに、「復陰
曰有如見乎」の朱注がある。)

2、久〔国〕(なし)

3、(国会本には、クはフリガナの
一部としてある。)

4、(国会本には、「潮音更按為法

涅槃經南本廿廿曰人身難得又曰我今已值清淨法寶難得

(47ウ)

見聞又日常勤觀察是惡心一切凡夫不見是惡心過患菩薩見已不受不著放捨不護依八正道推之令斬之令斷
无量壽經下曰宜各勤精進努力自求之

(十九)

与都之問美蛇伊都々乃毛乃々阿都麻礼流伎田奈伎

微卒婆機伊止比須都問志捨之波奈礼須都倍志捨之

涅槃經南本廿二左曰四大如四毒蛇乃至聞四毒蛇氣臭可

惡則便遠離乃至五蘊如旃陀羅玄應音義廿四十三乃至不

能暫時親近左俱舍論一十四曰諸有為法和合聚義是蘊義

(廿)

伊可豆知之比可利之期止岐如電己礼之微波此志尔之於

伊都死都弥尔多具霸利常於豆閑可良受夜不可忍

涅槃經南本廿二左曰當觀其身猶如芭蕉熱時之炎水沫幻化

乾闥婆城坏器電光卅四左曰智者觀命繁屬死王又

(48才)

曰如大惡鬼瞋恚發時衆生苑王亦復如是

〔朱注・旧本及松本有都ノ上一字欠亦松本都下有七字欠・旧本松本有此下一字欠・旧本及松本〕

資糧の注がある。

(47才)

1、(国会本は、ここが貼付の境にあたり、次の一行に「自求之」を重複している。)

2、卒(国)乎

3、(国会本では、捐をみせけちにし、傍に捨と直す。)

(47ウ)

〔廿一〕都

比多留比乃多尔尔或請米
〇為人久須理理

毛止牟求醫与伎比止毛止无求善佐麻佐牟我多米尔為

也此一首文字剥落殆不可読今考文義以加略註卒章字畫

亦不同前文疑是後人所補也

涅槃經南廿十九曰菩薩思惟衆生知我良福田同廿十八曰

為四毒發求覓醫藥廿曰如捨親舊醫善良醫反從怨

憎求藥自療我亦如是捨離大師如未世尊廿露法味廿

右曰正是脩習善覺一時非是脩習不善覺時上

文政二年歲次己卯春三月投筆於駒山雜華堂之南窓

注4

下

〔48ウ〕

天保二年辛卯五月以江戸駒籠西教寺沙門潮音親墨

藁本臨焉

岡 正武

天保十二年辛丑十一月以岡正武所藏本謄寫之以

1、(国会本では、この注は、「比

乃多尔」の右傍に朱注としてあ

り、つづく、「之田」と左傍の「又

曰為人」の朱注が消してある。)

2、久須理(国)久須理師

3、醫(国)賢

4、(国会本には、「令法住利益衆

生」の一行がある。)

(48才)

舊版本及松屋本加對校了

黒河春村

(49才)

舊醫新醫

大經第二南本京敷品二十九、北本壽命品十三曰、譬如國王

受化之者領无鈍著少智唯有一醫

師、道性復頑真鮮內外巧說、而王不別厚賜

俸祿、供養外道療治衆病、純以乳藥、常藥我淨佛假說我即謬計即

亦復不知病起根源、雖知乳藥、佛假說我即謬計即

離相復不善解或有風眼冷癡熱愛病、一

切諸患悉教服乳、是王不別、是醬知乳好

醜善惡、復有明醫、如曉八種術、无常等四、及常等四、

善療衆病、對治諸迷知諸方藥、權實教法從遠方來、

世出是時舊医不知諮受、反生貢高輕慢之

(49ウ)

心、彼時明醫即便依附請以為師、諸阿羅邏仙鬱

頭藍弗等諮受醫方秘奧之法、語舊医言、我今

請仁以為師範、惟願為我宣暢解說請問世定

之舊医答言、卿今若能為我給使四十八

(48ウ)

(49才)

年、中阿含曰、就外道學、必先給使四十八年、然後与法、治城云、八禪各有六行、故

六八四然後乃當教汝医方、時彼明医即

受其教、我當如是我富如是、隨我所能當

給走使、是時舊医即將客医 共入見王、其同

緣是時客医即為王說種々医方、提謂授

鱗授及餘技藝、瑞應經所說大王當知、應

善分別、此法如是可以治國、三皈翻邪、應猶如治國、此

(50才)

法如是可以療病、五戒治五、惡、喻藥病、尔時國王聞

是語已、正方知舊医癡闇無智、即便驅逐

今出國界、捨然後倍恭敬客医、鈍便是時

客医作是念言、欲教王者今正是時、即語

王言、大王於我實愛念者當求一願、觀小

王即答言、從此右臂右手動便、臂小及餘

分身臂後大教並皆隨順隨意所求一切相与、彼客

医言、王雖許我一切身分、然我不敢多有

所求、比量觀機、唯稍小教今所求者、願王宜令一切

國內、從今已往不得復服舊医乳藥、所以

(49ウ)

者何、是藥毒害多傷損、故若故服者、當斬

(50ウ)

其首、我見生惑妨害事多、若聞正教、猶故計我當斷善根之首、斷乳藥

己、終无復有橫死人、以解斷惑、即是壽終以惑障解、即名橫死

常處安樂、故求是願、時王答言、汝之所求

蓋不足言、尋為宣令一切國內、凡諸病人

皆悉不聽以乳為藥、若為藥者、當斬其首、

衆生受化復傳未聞、即上中下皆得悟也、尔時客医和合衆藥

(朱注・醋・南本)

謂辛不淨苦無我鹹無常甜空酢苦等味、以療衆

病無不得差、其後不久王復得病、反執无常等教、

即是小執、即命是医、我今病困、当云何治、医占

王病、應用乳藥、因常之藥喻乳、尋白王言、如王所

患、應當服乳、我於先時所斷乳藥是非實

(51才)

語、開今若服者、最能除病、顯王今患熱、无

之觀能燒世間故譬火熱、正当服乳、因常之藥時王語能治无常時王語

(50才)

(50ウ)

医汝今狂耶、為熱病乎、狂是失心之病、諸先无常之解、熱則

驚病、謂更起邪常之病耶而言服乳能除此病、汝先言

毒邪常、是今云何服、今教常欲欺我耶、時王

受生不先医所讀、外道常我汝言是毒、令我

驅遣、今復言好最能除病、如汝所言、我本

舊医、定為勝汝、因常名同、迷執不決、是時客医復語

王言、王今不応作如是語、如蟲食木有成

字者、此蟲不知是字非字、智人見之終不

唱言是蟲解字、亦不驚怪、大王当知舊医

(51ウ)

亦尔、不別諸病、悉与乳藥、如彼蟲道偶得

成字、是先舊医、不解乳藥好醜善惡、時王

問言、云何不解、客医答王、是乳藥者亦是

毒害、邪常亦是甘露、我等云何是乳復

名甘露、若是乳牛、牛喻教主、即是法不食

酒糟酒清雪真諦三昧、糟濁喻滑艸裁泥洹

得如麥裁、分別智、其犢調善、所化菩薩、

柔和放牧之處、不在高原、不以涅槃為證亦不下

1、(是・非の二字に傍線)

(51才)

濕、不以生死為佳飲以清水、非五欲泥、非无明不
令馳走、不馳空真、濁即佞性清水、不與特牛同共一群、
无乳、譬无慈悲、明飲食調適、入空為饑、出如索有不共慈悲、假為飽、中道
牛特

(52才)

不入不出、即行住得所、住秘密藏、如是乳不飢不飽、雙行空假、
者能除諸病、是則名為甘露妙藥、除其乳已、
乳譬常教、此乳亦名醍醐、經下文云、牛食忍即出醍醐、是其義也、其餘
一切皆名毒藥、尔時大王聞是語已、讚言、
大醫善哉々々、我從今日始知乳藥善惡
好醜、即使服之病得除愈、无常小執亡、尋得常住法身、
時宣令一切國內、從令已往当服乳藥、上即
根人、自得解已、傳化中下、皆使得悟國人聞之皆生瞋恨、咸
相謂言、大王今者為鬼所持、為是狂耶、而
誰我等復令服乳、一切人民皆懷瞋恨、皆集
王所、王言汝等不應於我而生瞋恨、如此

(51才)

(52才)

(52ウ)

乳藥服与不服、悉是医教、非是我咎、尔時
大王及諸人民踊躍歡喜、倍共恭敬供養
是医、一切病者皆服乳藥悉除愈、

(52ウ)